脳卒中を知り、未来に備える──リハビリテーションから考える2つの講座



10月・12月の登美ヶ丘カレッジでは、「脳卒中」をテーマに、リハビリテーションの視点から2回にわたって学びます。脳卒中は、突然誰にでも起こり得る病気です。救急医療の進歩などにより救命率が高まる一方、発症後の後遺症や生活への影響、介護の負担などが課題となっています。

10月は、脳卒中発症後の早期から行う運動療法に注目し、失われた手足の機能が運動によってどのように回復していくのか、脳の働きとリハビリテーションについて分かりやすく解説します。

12月は、脳卒中後の身体機能や認知機能の変化、生活環境への影響などを取り上げ、「身体・脳・環境・経験」の4つの視点から、もしもの時に備えて今からできることを考えます。

2回の講座を通して、脳卒中の「回復」と「備え」について学び、自分自身や大切な人のこれからの生活を考えてみませんか。

第34回 奈良学園大学登美ヶ丘カレッジ開催のご案内

もし脳卒中になっても、運動があなたの手足を救います！！



奈良学園大学
保健医療学部
リハビリテーション学科
藤田 信子 先生

これまで死亡率が高いとされてきた脳卒中ですが、予防医学や救急医療の進歩により救命率が高くなってきました。脳卒中の救命率が向上する一方で、後遺症や介護の負担は現在の課題となっています。

そのため、脳卒中発症後、日常生活への早期復帰を促すためにも、発症初期から運動療法を取り入れることが重要とされています。脳卒中が起きてしまうと脳細胞は壊れてしまいますが、最近の研究では、できるだけ早く運動に取り組むことで脳の機能を取り戻せることがわかってきました。この講座では、脳卒中により一度失った手や足の機能が、運動によって改善していく脳の不思議な世界を解説していきたいと思います。

こちらから申込みください。

開催予定

日時：2026年10月31日（土）
13:00～14:30（受付 12:30～）
場所：奈良学園大学
1号館 4階 1409教室
定員：30名（定員に達しましたら、募集を締め切らせていただきます）

第34回 登美ヶ丘カレッジ 申込フォーム

第35回 奈良学園大学登美ヶ丘カレッジ開催のご案内

脳卒中後の機能回復の実際
―今から考える４つの備え―



奈良学園大学
保健医療学部
リハビリテーション学科
城野 靖朋 先生

脳卒中後には、運動機能だけでなく、認知機能にもさまざまな影響が生じます。また、元気な時には気づかなかった環境の問題が表面化したり、想定していなかった突然の発症に戸惑ったりすることもあるでしょう。

本講演では、脳卒中後の障害と回復、リハビリテーションの実際を学びながら、身体・脳・環境・経験という4つの視点から、もしもの時に備えて今からできることを考えます。

脳卒中について学ぶことは、自分自身や身近な人に突然の病気が起こった時、落ち着いて対応するための一つの「経験」になります。今回の講演が、その備えの一つになればと思います。

こちらから申込みください。

開催予定

日時：2026年12月5日（土）
13:00～14:30（受付 12:30～）
場所：奈良学園大学
1号館 4階 1409教室
定員：30名（定員に達しましたら、募集を締め切らせていただきます）

第35回 登美ヶ丘カレッジ 申込フォーム

第33回 奈良学園大学登美ヶ丘カレッジ開催しました

心の回復力 ～ストレス社会でどう生きる

日時：8月29日（土） 13：30～15：00
講師：保健医療学部看護学科 蓮池 光人 先生

今回の登美ヶ丘カレッジでは「心の回復力」をテーマに多くの方々とレジリエンスについて考えることができました。今回は大学での講義と同じスタイルでの、参加型の講義でしたが皆さんの様々なご意見をいただきながら楽しい時間となりました。「人間とは」について生物体、生活体の側面から考え、人間の個別性の作られたかた、個別性を作る「心」についてまで考えていきました。心については知っているようで知らないものだと皆さんも新たに考えるきっかけになったのではないでしょうか。レジリエンスつまり心の回復力を誰しもが携えているもの。どのようなストレス、困難も乗り越えていくこと。その一つ一つが成長に繋がること。これからも何歳になってもまだまだ成長していきましょう。ステキな時間をありがとうございました。



ニューズレター第21号　編集後記



今号のVol.21では、西尾章治郎先生（国際高等研究所 所長）からのあたたかいご寄稿をはじめ、子育て支援、がん看護、XR技術を応用したリハビリテーションなど、教員陣の熱意あふれる研究成果を紹介いたしました。

また「登美ヶ丘カレッジ」での脳卒中に関する学びの提案や、地域で豊かに活動する学生たちの姿からは、学術と地域を結ぶ確かな手応えを感じております。

本号が、皆様の暮らしやこれからの健康な未来を考える一助となれば幸いです。今後とも本学の教育・研究・社会貢献活動に変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。

奈良学園大学
社会・国際連携センター長
伊藤 健一

発行 奈良学園大学 社会・国際連携センター
〒631-8524 奈良市中登美ヶ丘3丁目15-1
TEL：0742-93-5405　FAX：0742-95-9850

奈良学園大学 NARAGAKUEN UNIVERSITY
ニューズレター Newsletter
Vol.21
2026年10月発行

けいはんな学研都市を支える「知」の交流

関西文化学術研究都市（けいはんな学研都市）には、大学や研究機関、企業などが集まり、「知」の交流と新たな価値の創出が進められています。

奈良学園大学も、けいはんな学研都市『大学・研究機関』共創会議に参画し、各大学・研究機関との連携を通じて、けいはんな学研都市における知の交流と新たな価値の創出に取り組んでいます。

今回は、同会議の座長を務める国際高等研究所西尾章治郎所長にご寄稿いただきました。あわせて、国際高等研究所の取組をご紹介します。

奈良学園大学と拓く、人に寄り添う未来

奈良学園大学は、「人間教育」「看護」「リハビリテーション」という、人の成長と暮らし、そして健康を支える分野に特化し、少人数教育を通じて豊かな人間性と高い実践力を兼ね備えた人材を育成されている大学であると、以前より深く認識しております。

また、アドミッション・ポリシーにおいて、「地域社会および社会全体の発展に貢献したいという意欲を有する学生」を受け入れる方針を明確に示されるとともに、「けいはんな学研都市『大学・研究機関』共創会議」や学際交流事業などを通じ、本学研都市の知的ネットワークの構築にも積極的に貢献してこられました。その先見性と不断のご尽力に、心より敬意を表しております。

今日、けいはんな学研都市に求められているのは、大学・研究機関・企業・自治体、さらには地域住民までもが組織や分野の垣根を越えて集い、それぞれの知と経験を結び付け、新たな価値を創造する「共創の場」の形成です。国際高等研究所も、「人類の未来と幸福のために何を研究すべきかを研究する」という理念のもと、学問分野、世代、そして組織を越えた対話を重ね、未来社会を切り拓く知の創造に取り組んでおります。



国際高等研究所
西尾 章治郎 所長

人工知能(AI)が社会の姿を大きく変え、人生100年時代が現実となる今、私たちが真に問われているのは、「人間とは何か」「学ぶとは何か」「健康に生きるとは何か」という根源的な問いではないでしょうか。まさにその問いに真正面から向き合うことのできる大学が奈良学園大学であると考えております。

今後、AIと人間の共生、健康長寿社会、次世代教育といった人類共通の課題について、奈良学園大学と国際高等研究所がそれぞれの強みを持ち寄り、「けいはんな」という世界有数の知の集積地から、人に寄り添う未来社会のモデルを共に創造し、世界へ発信していけることを心より願っております。



8/25 第7回共創会議にて（西尾所長（右）、金山学長（左））

公益財団法人 国際高等研究所（IIAS）



国際高等研究所は、「人類の未来と幸福のために、何を研究すべきかを研究する」という基本理念のもと、固定された研究者を置かないという我が国の学術界でも極めて特色ある運営形態を採用し、経済界および官界からの力強いご支援を得て、1984年に創設されました。以来、けいはんな学研都市の中核的研究機関として歩みを重ねてまいりました。

本研究所では、この特色ある運営形態を活かし、多様な分野の第一線研究者が集い、複雑化・多様化する社会課題に対し、専門分野や研究領域を越えた学際的な知の融合を推進してきました。将来を見通すことが困難な現代社会においてこそ、その潜在力を最大限に発揮し、新たな知を創出する「共創の場」として、一層の発展を目指しております。

さらに、けいはんな学研都市における産業界・学術機関・公的機関・住民（産学公住）との緊密な連携を通じて社会課題を共有し、その解決に向けた価値創造のコミュニティ形成を進めております。多様な立場の人々との対話を礎として、学術の深化と社会実装を往還させることにより、社会変革につながる新たな知の創造に挑戦しております。

こうした活動を推進するため、現在は所長と三名の副所長が、それぞれ異なる専門分野・領域を担い、幅広い学問分野を俯瞰できる体制を整えました。この体制のもと、「自主研究」と「社会共創事業」の両輪によって、次の三つの重点テーマを推進しております。

・文化芸術と科学の対話の構築（赤松玉女 副所長）
・横断数理科学の新規開拓（山田道夫 副所長）
・社会課題の変容に対応する学術の新たな布置の探求（小林傳司 副所長）

国際高等研究所は、創設の基本理念を継承しつつ、けいはんな学研都市の多様な主体に橋を架けて結び、対話を通じた知の創造により未来社会の構築に貢献してまいります。今後とも、皆様の変わらぬご支援とご厚情を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。





みらいへの一歩（教員研究紹介）

健康や地域の暮らしを良くするため、本学の教員が日々挑んでいる研究の「いま」を分かりやすく紹介します。身近なところで生まれている、未来のための素敵な取り組みを覗いてみませんか。

地域子育て支援における居場所研究



奈良学園大学
人間教育学部
人間教育学科
学科長
岡村 季光 先生

2025年度より学科長を務めております岡村 季光と申します。以前（ニューズレター第8号）、教員紹介のコーナーにおいて、私は居場所に関して強い関心を寄せていることに触れましたが、今回は私自身が関わった子育て支援における居場所研究について紹介します。

今回紹介する研究では、「地域子育て支援拠点事業」という、主に3歳未満の乳幼児と保護者を対象とした交流や育児相談ができる身近な無料の遊び場（施設）に焦点を当てました。そして、施設を利用する子どもの保護者が、どのような過程で施設が「気軽」な場所として感じるようになるのか、調査を行いました。「気軽」な場所と感じているかどうかを調べるにあたり、例えば「ここにいればいいと思える」「自分の考えや悩みを分かってくれる人がいる」などの「居心地」（居場所における「所属的居場所」「受容的居場所」をどれだけ感じているか。以下、居場所感）を測定しました。

近畿圏の地域子育て支援拠点事業を行っている全施設から無作為に約3分の1を抽出し、郵送による質問紙調査を行った結果、主に明らかになったのは次の3点でした。すなわち、(1) 居場所感項目の得点に影響を与えるには約1年間の施設利用が必要ということ、(2) 利用頻度が高くなるにつれて居場所感の得点は高くなること、(3) 居場所感を高めている施設利用理由は①子育て相談や子育てに関する情報獲得、②身体的疲れやストレスの解消、③親や子ども同士の交流、④職員のサポート、⑤親子ともに施設に感じる楽しみ・安心感・気軽さに関する各要因が特に強く関連していることでした。

また、同時期に、施設をよく利用している保護者の方にインタビュー調査を行った結果、過半数の人が施設への安心感・受容感・気軽さの感覚を利用初期の段階から感じていたと発言していました。特に、保護者にとっては、職員に名前を呼んでもらったり、以前の施設利用時のことを覚えてもらっていたりすることが受容感に繋がっていたようです。この結果から、施設利用開始初期の段階での印象形成が重要であることがうかがえます。

居場所研究の対象となるのは主に子どもや若者が多い一方、それ以外の世代の居場所研究は相対的に数が少ないのが現状です。今回の研究において、子育て世代の成人を対象としたのは、意義深いと考えています。今後は各世代における居場所研究を積み重ねることが大切であると考えています。



【今回紹介した研究の書誌情報】
岡村 季光・清水 益治・西村 重稀・波田埜 英治・吉岡 眞知子・成田 朋子・碓氷 ゆかり・森 俊之・水上 彰子・中島 一・千葉 武夫・青井 夕貴 (2025). 地域子育て支援拠点事業の利用者の社会的居場所感の変容に関する研究 保育科学研究 , 14, 90-127.

婦人科がん患者のセクシュアリティに対する支援



奈良学園大学
保健医療学部
看護学科
松井 利江 先生

私は教育に携わるまで、約13年間婦人科病棟で勤務し、主に子宮がんや卵巣がん患者さん・ご家族に関わってきました。子宮がんや卵巣がんは生命維持に直接かかわる疾患ではありませんが、女性として生きること、すなわちセクシュアリティに大きく影響を与えます。がん治療が発展の一途をたどり、患者さんの長期生存が可能な現在において、セクシュアリティに対する支援は重要であり、がんをもちながら充実した生を支えることでもあると考えてきました。

そこで、博士論文では卵巣がんの診断や治療が、患者さんのセクシュアリティにどのような変化を与えるのかを修正版グラウンデッドセオリー・アプローチの手法を用いて質的に調査しました。卵巣がんは婦人科がんの中で占める割合は低いものの、検診が不可能で早期発見が難しく、予後が悪い疾患です。調査の結果、卵巣がん患者さんのセクシュアリティはその疾患特性と日本の社会的規範に大きく影響を受けていることが明らかになりました（図1）。分析を終え、調査に協力していただいた方数名に結果を確認して頂いたとき、ある人は泣きながら「これまで辛く、胸にしまっていた私の事実がここにある。これは私のことだ」と話してくださいました。この時、卵巣がん患者さんの体験をありのままに表現できたのだと感じ、安堵と喜び、何より精一杯に体験を語ってくださった研究参加者の皆様に感謝の気持ちでいっぱいになりました。このことから結果は論文として広く海外にも届けなければならないと感じ、Asia-Pacific Journal of Oncology Nursingに投稿しました。公表後、卵巣がん患者会を通じて世界卵巣がん連合（World Ovarian Cancer Coalition）の方が論文を読んで下さり、貴重な論文であると公式SNSで共有されました。さらには、卵巣がん患者さんならびに様々な立場で卵巣がん患者さんに関わる人が声を届けるInspiring Voicesという企画参加の招待を受け、インターネットを介してビデオメッセージを発信する機会を頂きました（図2）。私はこの経験を通じて、誠実に患者さんの声を聞いて研究と向き合うこと・結果を公表することの意義を痛感しました。

現在は博士論文の研究を土台として、「婦人科がん患者のセクシュアリティのケア実践能力向上を目指した教育プログラム開発（基盤研究C）」に取り組んでいます。日々、業務に追われるなかで思うような進捗ではありませんが、少しでも婦人科がん患者さんの幸せに貢献できるよう、頑張りたいと思います。



図1 研究結果



図2

XR技術を用いた新しいリハビリテーションの研究開発の紹介



奈良学園大学
保健医療学部
リハビリテーション学科
学科長
辻下 守弘 先生

VR(仮想現実)やAR(拡張現実)などをまとめて「XR技術」と呼びます。専用のゴーグルを装着すると、360°の映像世界が目の前に広がり、その仮想空間の中で身体を動かしながらさまざまなリハビリの練習を行うことができます。従来のリハビリは同じ動作の繰り返しが多く、単調でやる気を保つのが難しいという課題がありましたが、XR技術を使うと、仮想空間に没入することで練習を継続できることがわかっています。

それでは、これまで開発したXRリハビリを紹介します。まず、VR転倒体験システムでは、高齢者にとって寝たきりの大きな原因となる転倒場面をVR空間内で再現し、安全な仮想空間で危険な転倒場面を疑似体験することで、現実の生活に潜む危険の予知能力を高めることができます。

次に、VR筋力増強練習システムでは、VR内で動かす自分の分身（アバター）が、トレーニングを重ねるごとに「痩せ型」からたくましい「筋肉質」へと変形する仕組みを作りました。現実世界では実現不可能な自分の身体の変化により、練習の努力が目に見えて実感できることで主体的にリハビリを続けることが可能となります。

さらに、VR回想療法システムでは、高齢者が自分が生まれた故郷や懐かしい場所などをGoogle earth VRを使って仮想旅行することで、その場所にまつわる思い出や出来事を語ってもらいます。このような回想療法を行った高齢者を対象として脳波測定を行った結果、右前頭葉のシータ波が有意に減少することが確認され、これは認知機能の向上を示唆するものでした。

こうした研究成果は、2025年開催の大阪・関西万博だけでなく、今年の夏には大阪咲洲のアジアトレードセンターで開催された万博レガシーイベントにおいても展示・体験ブースとして出展し、多くの方に実際のXRリハビリを体験していただきました。参加者からは、「思っていたより臨場感がある」「これなら楽しく続けられそう」といったお声を多数いただき、大変好評を博しました。

XR技術はまだ発展途上の分野ですが、痛みや不安をやわらげ、練習への意欲を高める新しいリハビリの形として、今後さらに研究を重ねてまいります。皆さまにも、この技術の進歩をあたたかく見守っていただければ幸いです。



大阪関西万博



万博レガシーイベント

在学生からのメッセージ



奈良学園大学
人間教育学部
人間教育学科
2年次生
小出 和樹 さん

私は小学校教員になることを目標に、この大学へ進学しました。現在は小学校教員免許に加え、特別支援学校教員の副免許取得にも力を入れています。

課外活動では、レクリエーションサークル「KOKORO」を立ち上げ、部長として地域のボランティア活動や、外国人留学生・子どもたちとの交流活動に取り組んでいます。また、幼小接続サークルの副部長やオープンキャンパススタッフも務め、人とのつながりや直接触れ合うことの大切さを学んでいます。

将来は、児童が「学校って楽しい」と前向きに通うことのできる、居場所としての学校をつくれる教員になりたいです。そのため、大学で教育現場の工夫や課題をしっかり学び、将来に生かしていきたいと考えています。



奈良学園大学
保健医療学部
看護学科
2年次生
森川 萌葵 さん

大学での生活はとても楽しく充実しています。

私は現在天文サークルに入っています。授業が終了後に星や月の観察を行っていますが、特に冬はとても綺麗に見ることができ癒されます。アルバイトも週に2-3日基本的に平日に行っており、休日には友達などと出かけたりしています。テスト前には友達と分からないところを教え合いながら勉強し、先生方にも質問をしに行きやすく、詳しく教えてくださるので勉強との両立もしっかりとできており、楽しい大学生活を送ることができています。



奈良学園大学
保健医療学部
リハビリテーション学科
1年次生
大西 翔喜 さん

私は作業療法士を志し、日々勉学に励んでいます。

高校時代、水泳に没頭していた自分とは全く異なる医療の世界に戸惑いながらも、友人や先生方に刺激を受けながら充実した日々を過ごしています。作業療法士は、ケガや病気をみるだけでなく「その人らしさ」を支援する仕事でもあると学習しています。障がいをもってもあきらめることなく、少しでもその人らしく生活できる支えになれるよう、みんなと切磋琢磨しながら精進したいと考えています。

看護学科 学生活動のご紹介

天文サークルを通じた地域活動







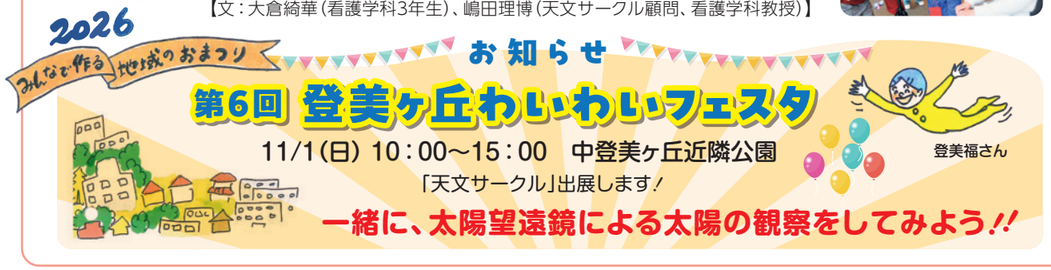
私たち天文サークルは、3学科計19名の学生で活動しています。普段の活動として、キャンパス内で望遠鏡を使って天体観望をするのはもちろん、子ども向けの天文教室など、地域と関わる活動にも積極的に取り組んでいます。

子ども向け天文教室では、望遠鏡工作キットを組み立てて、その望遠鏡で実際に月や土星などを観察してもらったり、双眼鏡を使った星空観察の楽しみを伝えたりしています。また、本学学友会が地域の子どもを対象に開催する「冬のお楽しみ会」では、天文シミュレーションソフトを大型ディスプレイに映し、3Dメガネをかけて宇宙旅行を体験してもらうコーナーを担当しました。精華町で開催される「けいはんな科学体験フェスティバル」では、太陽専用望遠鏡を使った太陽観望会を実施しています。

さらに今年度は、学園祭での模擬店出店や「登美ヶ丘わいわいフェスタ」への出展を予定しています。

これらの活動を通して、天文学や宇宙についての知識を深めるだけでなく、子どもたちに興味を持ってもらうための伝え方や工夫の大切さを学ぶことができました。また、実際に天体観望をする中で、子どもたちが驚いたり、達成感を得たりする姿を見て、活動の意義ややりがいを実感しています。

【文：大倉綺華（看護学科3年生）、嶋田理博（天文サークル顧問、看護学科教授）】





KYOTO SMART CITY EXPO 2026

奈良学園大学 出展テーマ：**専門性と連携で拓く未来のリハビリ**

奈良学園大学 保健医療学部 リハビリテーション学科
Where Expertise Meets Collaboration: The Future of Rehabilitation

奈良学園大学では、理学療法・作業療法の教員が、それぞれの専門性を生かした研究に取り組んでいます。
ATRとの共同研究によるロボット技術やVRの活用をはじめ、多様な研究と先端リハ教育を紹介します。
Explore PT and OT research, ATR-linked robotics and VR, and advanced rehabilitation education.